諸公画賛

凡例

一俳諧也者専奇賞于世久矣意者雅俗相混不遺世俗語焉故有雅言亦未敢言及之妙在焉固敗鼓不舎焉矢溺不舎焉故也而俗而不俗雅而不雅混有雅致斯乃俳諧之謂與臆奇賞乎世也宜矣自理觀之雅俗亦復不二矣奚舎之有然則至于詩妙至于文妙至于俳諧妙至于手蹟圍碁舞衣妙至其

妙所同樂豈有亦不一之妙邪。圖画不亦妙乎。況言之妙乎。

一比年凬馬相接者之容貌敢圖其像矣。題其名言矣。画苍無香。猶空中有艷。矧言乎。神情飛萬里。名聲傳千歳。吁画亦千歳不朽之業也。其稿稍成。各自請其賛之也。

一久不相接者乃難模。故今不囹于此。冀重補之也。

一如蕉翁嵐雪其角之輩。乃攀援於東之奥祖餞之句。而今漫圖其像。雖圖而苟且備足以其次耳。奥州祖餞者指陸奥千鳥也。

一古人之手跡曾在吾家藏者。幸圖其像。顕其言於上層。

一吾固有聞誦諸名言者。亦敢顕之也。

一有人云。何為不圖自像。曰吾不見我。雖然須史捉其影以圖分皆像焉。

享保十九年之春正月

東都岡田牝冲巣青壚著

いくや我
よそめの

待恋乃
まくらしきてろふ
あくと哉

山夕菴

一熗林
午寂

忠度の
右丸かいなや
山たく蹄

青柳の
細きやハ
なくて

文東

葉乃山
あとめの
下もしを
松
しの雪

沾山

見女
はつ寒し
雲にも似たる
眉の影

享保十三戊申年秋七夕
六十二歳剃髪

おもしろや
ことしめて涼し
ぼんのくぼ

大塲
恕只

きてみれは
渚のもと
みるあつ
まるや

黙書像

草の葉を
遊ひ
あるけよ露の玉

嵐雪

青梅や
二葉し
三筋老
木より

鴟心亭長水

ふしゆよ
心乃魂の
若紫
の外

文

梅ゝの香や
障子ほそ
めとよ
猫
の
影

安士

場思ゝやひよう
拝割し
菩その影

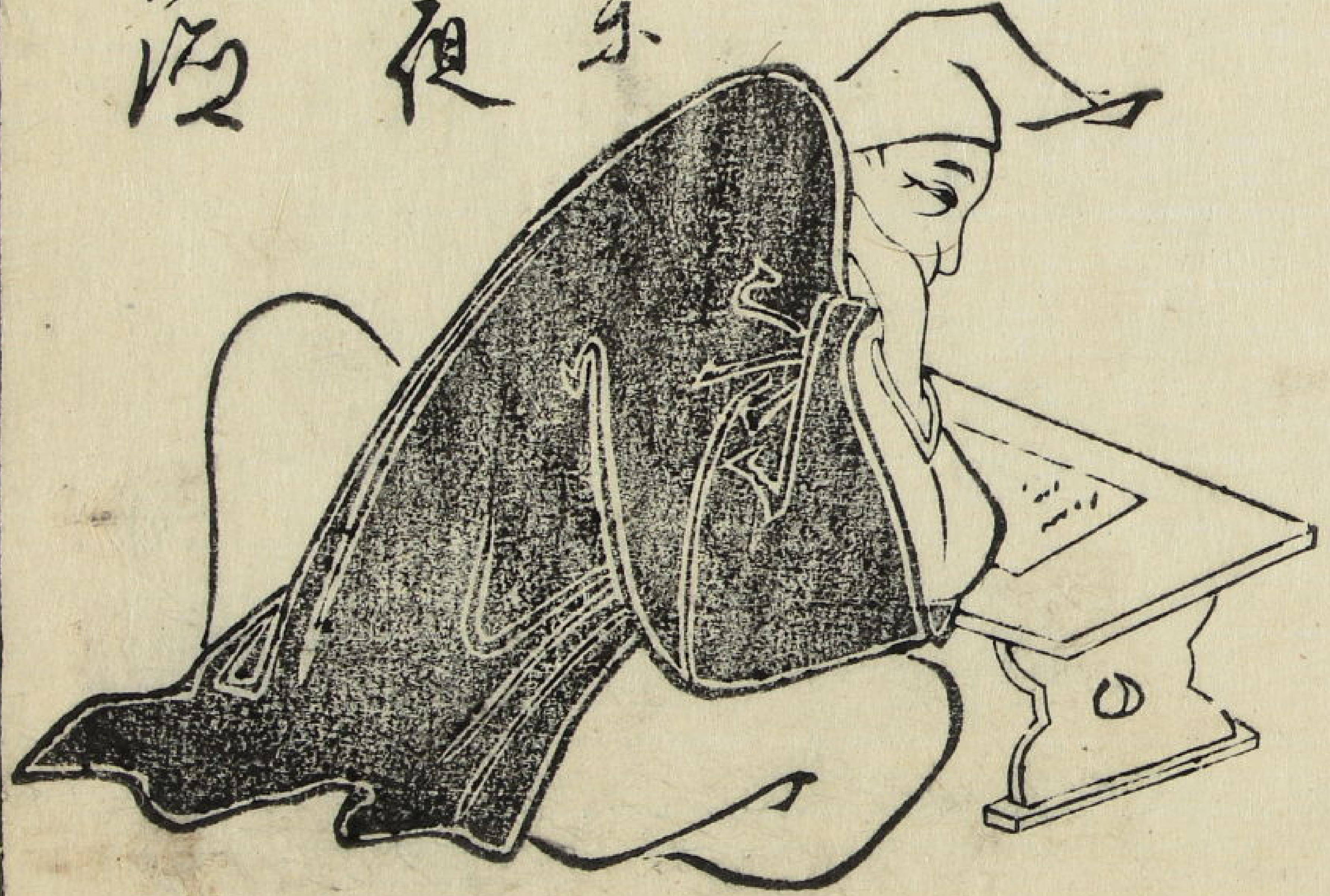
其郎十

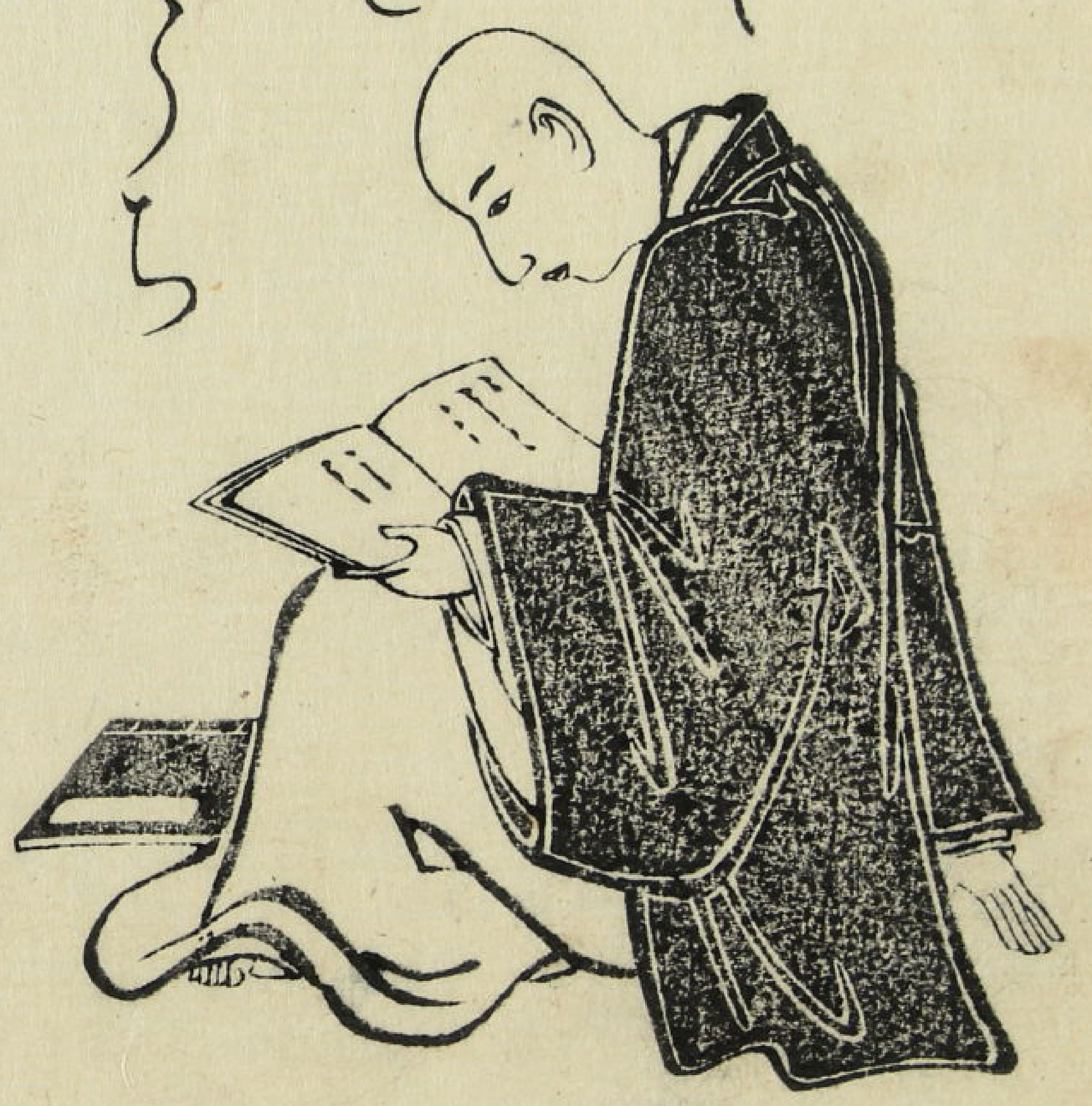
懸恨の長刀
あるかなきかや

千尾七風

柳に言ひ
蕭々にくし
あかの末
十三夜

蕪




ゆかしさ
としつら
流と
なみちら
鶴波

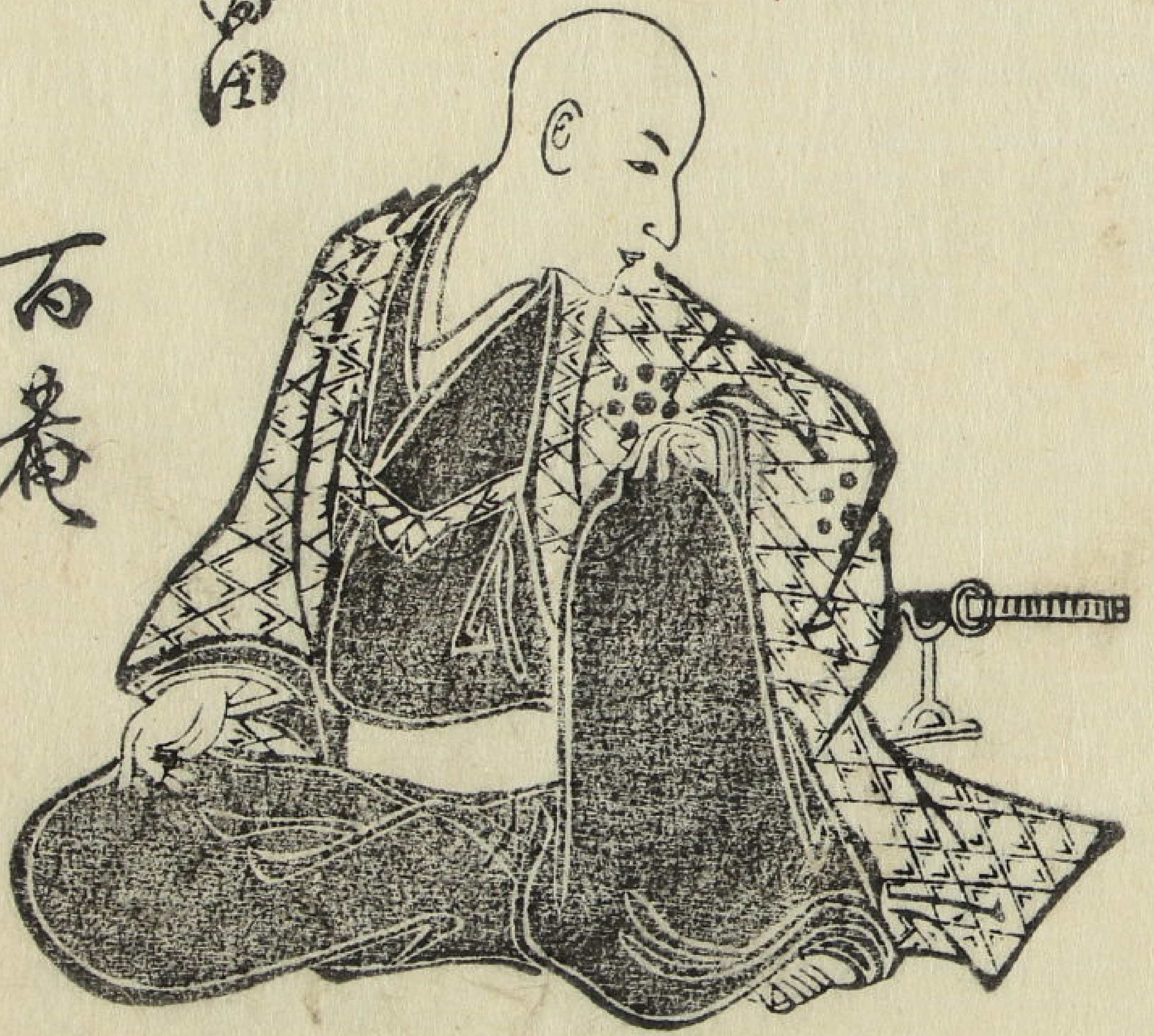
雪降
人より
なの緒は
附録下菊
素丸

よ浮雲や
すゞ
くれ
西の海

白光園 宗瑞

みしかや
ちくまの
仍れ
土麦の留

百庵



初之老

ゝゝや霞わきて
膳所の湖

柿木

行人を一日ふする
時雨哉

來川

名月や
人と
あらく
帆おろし舟

来ゝ時

武士はもみぢに
こりすめとハ

秋色

秋光
菊ぬくや
松の戸塚ても
さいわ口

山より深き
里
こしの
より聖
秋霞

壷月

よしてさこれ
佛みな
道に
藤葉
うら

蓮之

冬もし
ゑのし風は
松の凩

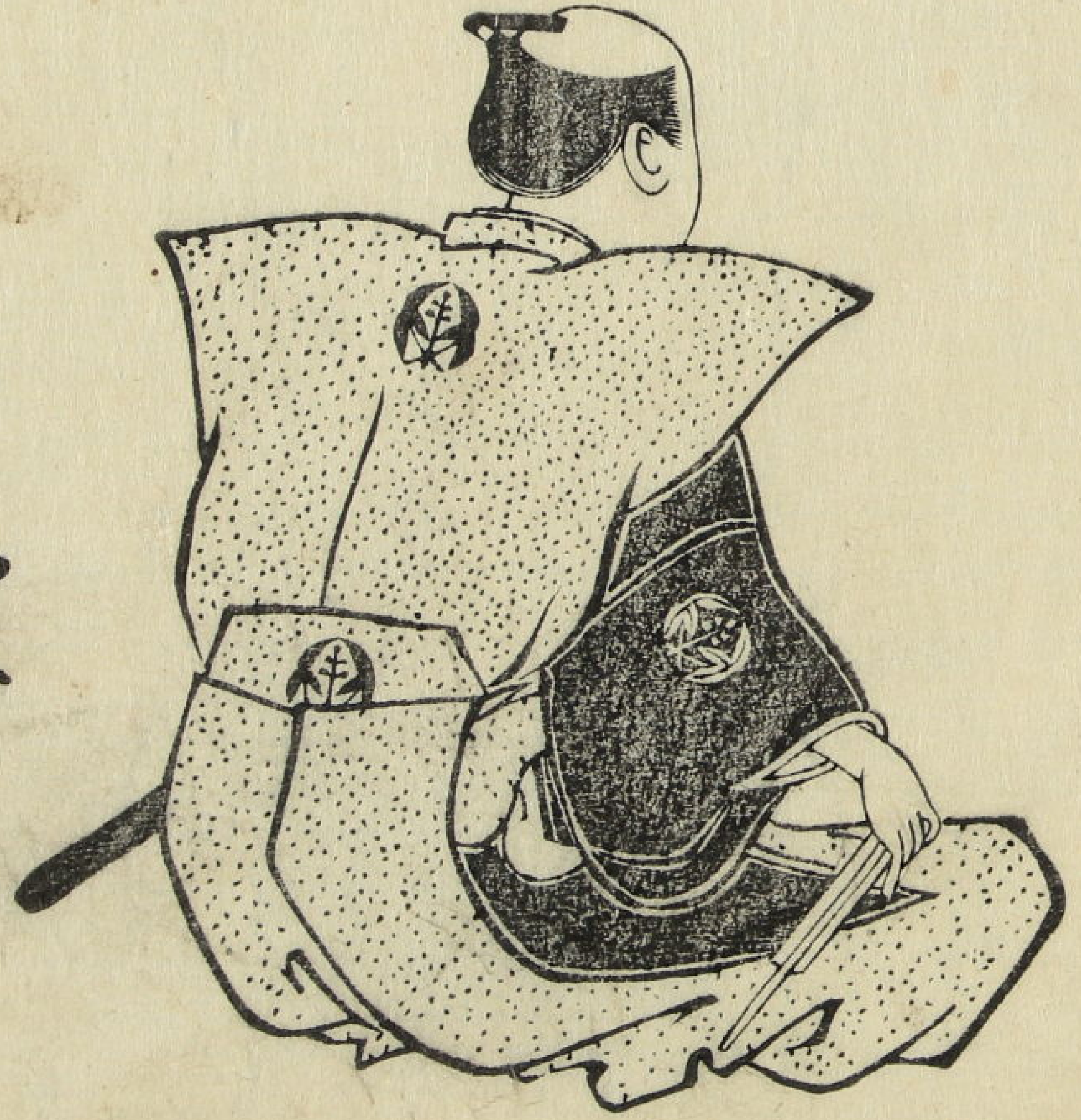
之角

下ゑみさへ
道いつくまし
雪仏人
為成

六盤仙鵞田氏

あふ虫の
わめりけ
ふみのむ
枯野かな

寿環



まつはけ秋よつ孫太夫白紙
ちふよ六あつさや月よりん
年よこころのこゝろあれハむが
出てしかもはあしるやらまは
としいんすと孫さりぬ

春の部

鶯喉くまて智の出春鳴けるを　六盌

大内の名起浅く若菜哉　超波

梅引や心の情乃なき所　壺月

志らう魚のうきのかるや後夜の鐘　素丸

春海若やあらはれなからの波の紋　青驢

川ぞひや柳もみどりの水をたつ　仙鶴

傾城の忍拂子さよ風　東之

ややひ子の袂に握て涼みけり　青尹

仇猫のなめて居るらん宵の口　青莪

汐干てや走る山ゐの大井川　貞佐

楨楨の庭踏氣や杰臺　北樹

木のもとに枚子吸るなりしもの雛　青峩

呵られて出る雨も花の山　六盆

さむげなり櫻の花は白けし　為邦

蕨摘さを根を中のはしらかな　其樹

唐門に出合へ花の名残かな　咫尺

夏の部

月むや機傳うつりの菖蒲川　百菴

小坊主と蕣の暖簾や字子就　青峩

の月に蓮のうきもふはゆるみけり　菸雛

涼しさに海見すへて星崎し　青玗

蛍火やまこも中を鴨のうら　長水

帯のあと陰れて古き新襦袢　貞佐

こきれいな縁側見つけり小梅賣　宴尺

浅瀬又宇治迄流されの螢かな　軽人

子乙女や先ついやりと庭の虫　起波

なでしこや蹄のあとを起あかる　長水

一ふきを雨をこへし底島　空翠

一日又二日契れり物あまへ　一池

捨し身の袖をいつまでかくすけり　納子

夕陽の塀より外をまさ黒し　文玗

忘れても人又育立のあつさかな　六盆

鶯の六月寒し木末哉　仙鶴

掛香や襟ぬひさせる妻の衣　青玗

秋すゞし寡のごとく国ヶ那　青尹

すゞしや秋をいろくの星あかり　超波

歌仙

飛小おちと月に去りぬる雲ヶ峯　青尹

まじごろくの雨後のすゞ燈　青莪

深手に笹の蝉振つゞけて　超波

揚麩の造りすゞしなるべし　尹

金龍に金を入る家國姓爺　莪

刈て貝屋の手子と貝　波

人知れぬ鴻のおもひを合されし　尹

内儀に蟻のはきしまふや　莪

唐紙をあてられたる飛鳥川　波

はるし気の初日をうつし　尹

押出て庭石ぎわの喚ぶ家し　莪

荒井の関もて黒鯛の中　波
風呂敷下ゆかりからぬ手つゝをこ両結ひ　玗
蔦の絣もて三両よ買ぞ　峩
夕月よ木場の盈奥ゆかし　波
其一文字下番の指うげ　玗
雲らつむもより上の大階子　峩
菜のさかなあし又御蒲公　波

椋本の吹矢うらむ先の眼　玗
畢丸をせきへて塗の翁　峩
祖師達の歌よハ悪筆ニ中　波
常さも茶比きなみせく憒　玗
佛性も裾のあかりかまを経て　峩
廿日鼠よまつる妻敎　波
月よ手うる鮭醤油あかるも小一盃　玗

母をさがりてよむも岩舟　戕
卯のもよるの鼻息かくさん　波
散気の使えごまなり　玗
夜もすしてくのおもハ浪平　戕
蛸の松どしみずいき振上ケ　波
鮲俵る田のさしぬききめをて　玗
神楽の鈴張壽をこ抱し　戕

温石も壁しかうよかてき立　波
啼ぎもゆまりす犬の拙しろく　玗
臭も坊くて木魚の一派花の陰　貞佐
雛う食ふて以後嫁臺　蟄筆

秋の部

深雪の荻流れや天の川　半雪
かりかけのひろ滝色や玉みかく　恩尺

桐の葉や枝をはなれて散るさま　超波

秋風はいまさらなるに桐の葉　淡二

いなつまや古町うらの河内山　十牛

ちる葉やひとつふたつ庭の雨　水國

せきれいのかゝへて飛ぶや石の上　沾山

古池の風落てやられ萩　宗瑞

翡翠よ隠す沼の園はし　青莪

落葉や鏡の中張志篭　六盌

かゝる雨やおのゝ腕も寄る伏　青玕

甲斐の国の入日まはらし柳の照　大梅

鶏老いの宿よ酒りてふの泡　超波

新ろやとそや蜜すゝ涼なる　南子

俤る秋の池央くらし簾の声　水光

從をねふて扇るや辻角力　十牛

雛頭やちりてちるかき摘ゆけ雪　貞佐

行舟よあそびしと見ゆる嵐山子かな　宗瑞

霞より親の苦や菊の花　六盌

庭園の火鬼灯ほどの夜長かな　木昌

冬の部

炉開やむかしの内儀ハ小紫　青峩

まこへ草枯野の虫も志らみゆく　蓮之

年寄の留守もまれあるかな　来川

達摩忌や粥吹さまし山おろし　素丸

あら海へ舟うち投るおりふし　超波

十月の力ぬけたる氷の筆　青玡

床らしく内匠か削る唐木かな　故一

むら鳥も時めく冬や草木枯　六盌

菜畠へ折々通ふ千鳥かな　桂夕

凩に一僧洞に山猫に　魚貫

木からしや吹てふとく馬の汗　青玗

木からしや枕をくゝし鐘の声　琴梢

初雪や流なける手ハまの傍　余力

志くれや袖笠かとき人寄る　超波

雪の傘つもり薫に似るかな　青峩

歳くれや此二町まち町の者　巴人

乾鮭の口切れ上る嵐かな　故一

てすさん姫川より落しの紙　暁雨

新嘗や黒き酒持川役もまて　青玗

やゝ宿しや菜雜そりて年の暮　青峩

打よしや乳目ゟ僅鼻のさき　六益

めてたさに泪こほして歳のくれ　蓮之

享保十九年三月

彫工　大久保一富

書林　若菜屋板

俳諧書目録

類柑子　三冊	隻尾琴　三冊
後餘花千二百句　二冊	三上吟　一冊
代ゝのそ　五冊	續のもう　二冊
俳度曲　二冊	百福壽　二冊
續江戸ならし　二冊	續福壽　二冊
誹太郎　二冊	百花實　二冊
花擔篭　二冊	清田の葉　二冊
帋ふいと　三冊	倉の衆　三冊

江戸名所集　三冊	夢想あふき　一冊
箙の花　二冊	或問珍　一冊
江戸今八百韻　一冊	初懐帋　一冊
梨乃園　四冊	一挽史　一冊
吉川俳書　一冊	露乃歩　一冊
金あふき　一冊	若壮　二冊